

花時計



vol. 43

2022 March

特集

女性学研究所

- 学科&大学院のTopics of the year
- 教員エッセー
- 退職教員
- 行事報告
- 新任教員紹介
- BOOKS 新刊紹介

川村学園女子大学

我孫子キャンパス／目白キャンパス

特集

女性学研究所

女性学研究所設立の経緯

川村学園女子大学女性学研究所（以下、女性学研究所）は、2003年4月、本学の文学部、教育学部、人間文化学部（現、生活創造学部）の3学部に所属する教員18名によって設立されました。第1回の研究会は、その年の4月23日に開催されています。初代研究所所長は、美術史を専門とする若桑みどりでした。

本学では、開学以来、女子大学であることを象徴する「女性学」という科目を設け、女性にかかわる様々な学問的知見を伝えてきました。また、女性学の副専攻、女性学を3本の柱の一つとした大学院修士・博士課程も設置することにより、学生たちに「女性学」のさらなる学びを提供していました。

女性学研究所でも、所属する教員の研究報告の場として、『川村学園女子大学女性学年報』を2003年5月31日に刊行しました。創刊号に掲載された論文の執筆者を見ると、宗教学、日本文学、英文学、臨床心理学、幼児教育学、労働社会学などを専門とする本学の教員の名前が挙がっています。女性学は、体系化された学問ではなく、研究者が自分の専門領域の課題を「女性学（ジェンダー）の視点」から研究することを指します。現在も、女性学研究所に所属するメンバーの専門は多様です。

女性学研究所が設立されたころ、日本では男女共同参画社会基本法（1999年）が成立し、社会における男女共同参画を進めるための施策が実施されていました。また、女子大学を中心に大学や地域の女性団体等も、男女平等にかかわる講座を開催するなど様々な活動を行っていました。例えば、学校教育の場を例にとると、男女別男子優先の名簿が男女混合の名簿（性別ではなく50音順の名簿など）になったり、「男子は～くん、女子は～さん」といった男女別の呼称をすべて「～さん」づけに変えたりなど、今では当たり前とされる学校慣習が始まったのもこのころでした。

年報

女性学研究所 所長

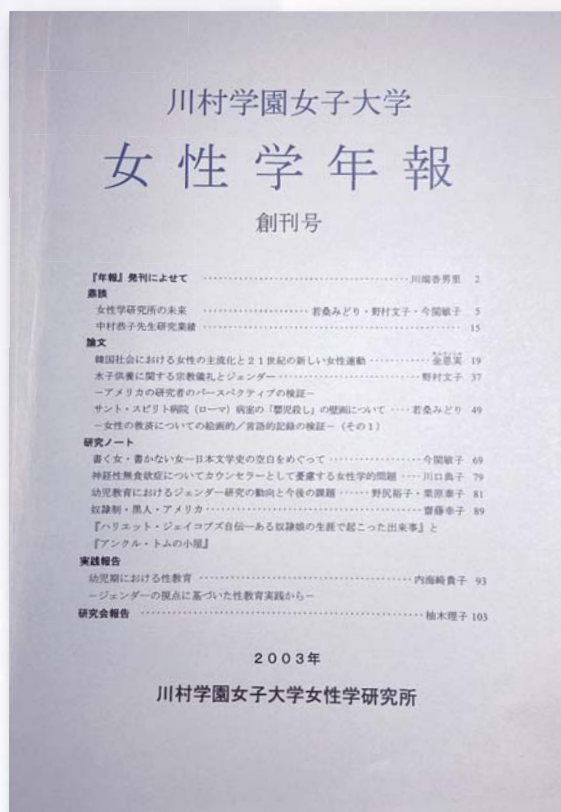
内海崎 貴子

大学のある千葉県我孫子市は、2001年6月、男女共同参画宣言都市（現在、千葉県で唯一）となり、2006年3月には「我孫子市男女共同参画条例」を制定していますが、女性学研究所のメンバーもこれらの宣言や条例制定に深く関わりました。男女共同参画都市宣言のセレモニーでは、教育学部幼児教育学科の学生が、宣言を読み上げるという大役を果たしました。その後も、女性学研究所のメンバーは、地域の様々な活動や男女共同参画関連事業等に参加しています。

一方で、2002年ごろから始まったジェンダー・バッシングにより、女性学研究所の活動を進めることができない時期もありました。その間、女性学研究所では鶴雅祭の時期に合わせ、講演会や映画の上映会などを開き、地域貢献活動を行いました。その後、女性活躍推進法（2015年）が施行される前後から、女性の社会貢献が期待されるようになっていきました。

今、本学に入学してくる学生はもとより若い世代にとって、ジェンダー平等は当たり前の感覚になっています。多くの大学ではカリキュラムにジェンダー関連科目を取り入れ、ジェンダー研究センター等を設置しています。

しかし、女性学研究所は、「女性学」という名称を堅持しています。それは、本学が女子大学であることと深くかかわっています。世界経済フォーラムが公表している日本のジェンダーギャップ指数は、2021年3月、156か国中120位で、先進国の中では最低レベル、韓国や中国、ASEAN諸国よりも低い結果です。残念ながら、日本のジェンダー平等は進んでいるとは言えません。つまり、まだ「女性」の抱える課題・問題は解消されているわけではないのです。女性学研究所は、社会の中で、女性が女性であることに誇りをもって生きていけるように、これからも「女性の視点」を大切にします。



女性学研究所のこれまでの活動

事務局

近藤 千草

川村学園女子大学女性学研究所（以下、女性学研究所）は、2003年4月、若桑みどりを代表とし、18名の教員によって開設されました。代表の若桑は、「ヴァーチャル研究所」として開設したと述べていますが、研究所という組織を構築することにより、「女性学の発展はいつそう堅固で確実なものとなった」と確信しています。また、学会組織を取ることで、本学の在職教員のみならず、退職教員、学生、卒業生というように広汎な会員を包含し、国内はもとより国際的な視野を含めた活動が可能になったことは、女性学研究所開設の意義であると認識しています。2003年に副学長であった川端香男里は、「女子大学が最大限にその存在価値を示し得るのは、女性学・ジェンダー学の領域」であり、「女性学の副専攻、女性学を3本の柱の一つとした大学院修士・博士課程の設置、そしてこの女性学研究所の設立」は、学問的・教育的観点、さらには経営戦略的にも重要な柱であると述べています。こうした女子大学ならではの特徴と魅力とを発信していく中核が女性学研究所であり、大学の社会貢献へとつながっていきます。

2005年には、「女性学会規定」が策定され、女性学研究所設立の趣旨について次のように示されています。「21世紀は、社会における女性の役割が飛躍的に変化、増進する時代である。この時代において女子の教育に携わる本学の教育者は、現代における社会的、文化的、歴史的状況を知り、21世紀の未来に生きる学生と共に、最先端のジェンダー・女性学を自ら創出することを責務とする。またこの成果を学の内外に向けて発信し、社会に貢献す

ることが望まれる。このような目的をもって、ここに女性学会を組織する」。女性学研究所の開設から18年が経過しましたが、本趣旨の実現に向け、年次定期総会や定期的な研究会の実施、『女性学年報』の発行、我孫子市などの地域における啓蒙活動、ジェンダーや女性学の観点に基づく外部講師による講演、シンポジウム、さらに2021年には川村学園女子大学教育研究奨励による報告書の作成など、多様な活動に取り組んできました。成果の一部は、2005年に創刊された『女性学年報』（創刊号から第6号）の中に見ることができます（表1）。

2021年現在、内海崎貴子を所長とし、学長の熊谷園子、副学長の西川誠を筆頭に、各学部からの教員13名が所属しています。現在の研究テーマは、「女性学・ジェンダーの視点から再考する建学の精神とその現代的課題」と設定し、建学の精神を踏まえた女子教育の意義について、近年の国際的な動向も踏まえた多様な観点（SDGs、男女共同参画、キャリアデザイン、多様性等）からの再考を試みています。本学の開学は、1924年の川村女学院に始まり、「感謝の心」を基本とした「自覚ある女性」の育成を行い、「社会への奉仕」に視点を向けた人材育成に取り組んでいます。このような建学の精神は、予測不可能で複雑な社会の中にあっても、一人ひとりが自らの意志で持続可能な社会の形成者として生きる根本的理念であると共に、時代が変わろうとも普遍性を持つ精神であると言えます。女性学研究所は建学の精神に依拠しつつ、未来志向を生み出す研究に邁進していきます。

表1 『女性学年報』に見るこれまでの取り組み

取り組み	数
年報発行	6巻
論文	17本
研究ノート	7本
実践報告	2本
講演・トークショー	3回
シンポジウム	2回

女性学研究所の近年の活動

事務局

永嶋 久美子

女性学研究所では建学の精神に関する研究として、本学の建学の精神を記した著書『新版こころ』に、女性学研究所所長内海崎貴子が第5章「これからの女性を考える」を執筆し、創立者川村文子の生涯、川村女学院創立の経緯、建学の精神、大学で学ぶことの意義、現代の多様化した女性の生き方、女性の働き方、女子教育の在り方等の現代的課題を取り上げた。2019年度からは、研究会において、建学の精神に基づく女子教育などの研究報告を継続的に実施している。発表テーマなどを表2に示した。研究会では、創立者の女子教育への思い、時代の

要請に見合った、学問的根拠に基づく、生活や社会に活きる知識・技術を身につける学習が推進されていたことを改めて学ぶことができた。また、創立者の実践した教育は、今日の川村学園女子大学へとその精神がつながっていることを改めて実感した。

これらの活動をさらに発展させるため、2021年度は川村学園女子大学教育研究奨励を受け、「女性学・ジェンダーの視点から再考する建学の精神とその現代的課題」について研究活動を進めていく予定である。

表2 2019年度以降の研究報告

	開催日	テーマ	報告者
第1回	2019年6月26日	川村女学院の建学の精神に基づく教育実践について ——春日鉦一の足跡を手掛かりとして——	幼児教育学科 近藤 千草 教授
第2回	2020年2月26日	川村女学院の健康教育と食育 ——栄養学の啓蒙普及期——	生活文化学科 今井 久美子 教授
第3回	2020年11月25日	川村女学院における裁縫教育の変遷 ——コロナ禍で見えた現代への有用性——	生活文化学科 高橋 裕子 教授
第4回	2021年7月28日	教育思想と女子教育	児童教育学科 山口 恭平 講師

報告者の所属、職位は発表当時のものを示した。



● 国際英語学科

国際英語学科では「英語を使う」体験を重ねて実社会で役立つ英語運用能力を培うことを重視し、さまざまな活動を行ってきました。昨年度はコロナ禍のため行事の多くが実施できませんでしたが、今年度は少しずつ再開しています。1年生の英語レシテーション・コンテストは6月の予選、鶴雅祭の一環としての本選ともに、オンラインにて開催しました。

9月には川村英文学会大会をやはりオンラインで開催し、本学名誉教授の佐藤浩子先生に「『レオミュール通りの日々 定年後、パリに暮らして』1年間の滞在を6つのテーマでお話します。」というテーマで講演していただきました。「キャリア・イングリッシュⅠ」の浅草寺での通訳ガイド実習も、学生を小人数のグループに分けて開始時間をずらすなど、感染対策に留意して実施の予定です。

助教のシャバリン先生は授業以外にオンラインによる英語セッションを開催し、多くの学生が参加しています。先生の指導の下、先ごろ1名の2年生が英語検定IELTSで4.5という好スコアを取得し、来年度4月から英国チチェスター・カレッジへ1年間留学することを志しています。国際交流活動復活の最初の一步としてぜひ成功させたいと願っております。

(菱田 信彦)



● 史学科



コロナ禍二年目も、状況に応じて対面とオンラインを使い分けながら授業が行われました。昨年度と同じく多くの学外見学が中止を余儀なくされ、史学科の特色の一つでもある歌舞伎鑑賞や博物館美術館見学もほとんど行えませんでした。また、新入生同士が直に顔を合わせて親睦を深める機会も大きく制限されてしまいました。

一方で、オンラインの授業を余儀なくされた結果、授業での電子機器の利用がこの二年で一挙に進みました。対面かオンラインかを問わず、レジュメをオンラインで配布する先生も多くなりましたし、アプリを用いたレポートの提出やオンラインアンケートも積極的に行われています。特に今年度の一年生には全員にiPadが貸与されたので、教員も学生も試行錯誤しながら授業で使っています。新型コロナウイルスの流行が終息した後も、対面とオンラインのそれぞれの利点をうまく生かしながら、新しい授業の形を模索していきたいと思います。

(大西 克典)

● 心理学科

心理学科では、コロナ禍の為、公認心理師関連の実習が前期はほとんど中止となってしまいました。しかし、後期になり、対面授業が再開されると、3年生の心理実習（基礎）の授業では、我孫子市の適応指導教室「ヤング手賀沼」において通所中の学童とマンツーマンで向かい合い、触れ合う活動を5日間行いました。勉強を個別で教えるだけでなく、外に出てスポーツを楽しむ学童をサポートしたり、園芸の手伝いをしたり、ひとりひとりの心の成長によりそうことを学べました。

また、4年生の心理実習（応用）では、産業領域の施設より、オンラインの演習を行っていただきました。産業領域では、モデル事例で、うつ病で休職中のクライアントにどのような支援が必要かを学びました。さらに、外部実習では、医療領域の精神科クリニックにおいて、復職支援プログラムと一緒に参加し、利用者の方と運動をするなどの体験見学が出来ました。教育領域では、東京学館船橋高等学校においてスクールカウンセラーが実施する心理学講座などに参加し、2日間にわたり心理職としての役割や支援について学びました。また、生徒向けの心理学講座では、寸劇を披露して対人関係の難しさなどを表現し、心理的支援をどのように伝えるかについても学びました。写真は、心理学講座と一緒に参加しているところです。

(平間 さゆり)



● 日本文化学科



日本文化学科では、例年、外部講師をお招きし、また学外の聴講者も受け、ひろく大学での授業にふれていただく公開授業を企画しています。

今年度は10月2日(土)に「日本の伝統芸能(2)」という主に民俗芸能に関する科目を公開授業として開催しました。「日本の獅子舞大解剖!」というテーマで、日本の芸能全般に登場する獅子舞について2名の先生をお招きして徹底的に解説していただきました。また獅子舞に関する研究の話だけでなく、先生方が関わってきた仕事や活動、すなわち芸能を今後どのように未来につないでいくのかという話もしていただきました。講義の後は先生にお借りした様々な獅子頭を実際に触らせていただき、本学科が大切にしている実感をともなう授業となりました。

今年度は新型コロナウイルスの感染拡大を鑑み、学生だけ対面で受講しましたが、授業の映像を大学webページで公開し、多くの方に大学での授業にふれていただきました。
(伊藤 純)

Faculty of Liberal Arts

● 幼児教育学科

一年生の「幼児教育体験学習」では、多様な「ひと・もの・こと」に出会い体験することを通してコミュニケーション力を養い活動を実践的に行うことができる保育者になることを目標としており、附属保育園における保育士体験、野菜の栽培、外部講師講演、外部施設見学などを行っています。前期の附属保育園との交流では、新型コロナ感染防止の配慮から、大学と保育園をオンラインでつないでペープサートの上演や触れ合い交流を行ない、学生にとってICTの効果的な活用と園児との双方向のやり取りの工夫を学ぶチャンスとなりました。また、前期末に野菜畑で育てたトマト、きゅうり、なすなどの収穫、夏休み明けには自分たちの栽培の成果を芋掘りによって確かめ、喜びを分かち合いました。学生同士、力を合わせて取り組む楽しい活動のなかで、達成感を味わう体験を重ね、自主性や共同性といった保育者としての人間性を培っていきます。
(中山 佳寿子)



教育学部

Topics of the Year

● 児童教育学科



「教師になる」という夢を実現するための学科です。そのために、知識や技能だけではなく、「体験」を取り入れ授業を行っています。今回は、その中のいくつかを紹介します。

1年生は、5月、基礎ゼミナールで、「我孫子第二小学校」を訪問しました。5年生の国語の授業を参観し、その後、校長先生からご講話をいただきました。入学して3ヶ月、授業を受ける立場から、授業を行う立場になり、教員の目線で児童や教室を見るポイントを学びました。

2年生は、10月、「我孫子市立並木小学校」を訪問し、音楽と体育の授業を参観しました。後日、学んだことをパワーポイントや模造紙にまとめ共有しました。授業を見る視点が定まり、発表し合う中で学びが深まりました。

3年生は、後期に「4週間の教育実習」を行っています。実習期間はそれぞれ異なりますが、11月中には全員が実習を終えました。実習前には、PCR検査を受け実習に臨みました。コロナ禍ですが、どの学校も快く実習を引き受けて下さいました。感謝の気持ちを持ち、本気と覚悟を胸に魅力的な先生になって欲しいと願っています。

(横山 悦子)

Faculty of Education

● 生活文化学科

生活文化学科ではオンライン授業が基本となる中、調理実習はほとんどの授業が対面形式で行われ、感染対策として2クラスに分け、黙食による試食を実施して衛生管理を徹底しました。栄養士資格取得のため我孫子市及び同教育委員会などの協力を得て、小／中学校・保育所での校外実習が行われました。家庭科教職課程を履修する3年生は「被服実習(立体)」で自分の身体に合うワンピースにも挑戦し(写真)、人体と衣服の形態との関係を理解しました。少人数授業のため手厚いサポートを受けながら被服構成の基礎や被服材料を理解して、縫製技術の基礎を身につけました。「家庭電気機械」ではミシンの仕組みや故障原因と修理を学び、被服製作を指導する上での留意点を確認、住居学や人間工学を踏まえたキッチンの製図や調理設備の扱い方を実習しました。「保育学」では附属保育園での食育活動や子育て支援センター(かわむらんど)での実習を行い乳幼児理解を深めました。家庭科教職課程のカリキュラムが整い、学習指導案の作成や模擬授業に取り組み教育実習に向けて頑張っています。

(佐々木 唯)



● 観光文化学科



観光文化学科では授業の一環として「環境保護や健康増進につながる、おいしい植物肉を広く世の中に広めること」を目的に、4月から16名の学生が「植物肉」のベンチャー企業、グリーンカルチャー株式会社との産学連携に取り組みました。

まず、同社社長から「植物肉」に関して基礎的な知識を教わり、どのような方法で身近に「植物肉」を広めていくかについて検討を行った結果、学生からは目白の飲食店で植物肉メニューを展開したいとの発案があり、学生が直接いくつかの店舗へ協力要請を行って、メニューの提案、店頭POP制作やSNSでの情報発信などを展開しました。こうして、10月中旬から11月中旬にかけての約1ヶ月間、欧風カレーとハーブ料理レストランの「BRIBON」と雑穀米おにぎりの「文蔵」にご協力いただき、ご提案したメニューを販売していただきました。実際に召し上がったお客様からは「この植物肉は特においしい。また食べてみたい」などの評価をいただいています。産学連携の取り組みは、企業とのプロジェクトを通じて、学生の主体性、問題解決に関する思考力や協働学習の能力だけでなく社会人基礎力を高めることにもつながっています。

(丹治 朋子)

Faculty of Creative Life

大学院心理学専攻では感染症拡大防止のための対策を講じながら、学生の学びを止めない工夫を行っております。その1つがオンライン実習です。公認心理師の関わる5領域(医療・福祉・教育・司法・産業)の様々な機関と連携し、各機関がどのような心理支援を行っているかを実際に働いている方々にお話しいただいています。今回は教育領域の実習として行われた、あずさ第一高等学校によるオンライン実習についてご紹介します。

8月31日(月)、あずさ第一高等学校野田本校とオンライン会議システムをつなぎ、野田本校キャンパス長と主任カウンセラーから、あずさ第一高等学校での生徒支援の取り組みについてお話いただきました。あずさ第一高等学校は登校型中心の通信制高等学校であり、中学校までの期間に不登校を経験した生徒が多く在籍しています。その生徒たちの学校生活をどのようにサポートしていくのか、教員とカウンセラーそれぞれの立場から様々な工夫が紹介されました。最後の質疑応答の時間には学生から質問が多数あがり、熱心に学んでいる様子が見られました。今後も世の中の状況を確認しながら、実践的な学びを継続していきたいと考えております。

(松岡 靖子)



研究棟の窓辺にて

高齢者が安心して使える インターネットを

文学部 心理学科
桂 瑠以



私は、これまでの研究活動として、インターネットに関する研究を中心に行ってきました。インターネットの研究に着手したのは、学生時代の修士課程の頃であり、その後、博士課程を経て、本学に着任してから、このテーマを軸にして研究活動を続けています。とりわけ近年では、高齢者のインターネット利用についての調査や実験を行っています。

高齢者のインターネット利用率は、近年、急速に増加しており、パソコンや携帯電話などのネット機器の保有率も高くなっています。ただし、インターネット上のサービスやアプリは、若年層を対象としたものが大半で、高齢者には馴染みが薄かったり、使いづらいものも多いという問題が挙げられます。そのため、高齢者にインターネットをより快適に利用してもらいたいと考え、高齢者向けのネットシステムを開発してきました。

この「高齢者向けネットシステム」は、2018年から開発研究を行っており、現在も改良を重ねています。システムの特徴として、スマートフォンやパソコンで操作することができ、スマートフォンの操作に慣れていない高齢者も操作しやすい簡便な機能や、見やすく分かりやすい画面表示を用いています。システムにログインすると、高齢者同士での交流の場である「オンラインカフェ」、自分の健康状態を測定したり、カレンダーに表示して健康チェックができる「健康チェックカレンダー」、インターネットの使い方やルールを学ぶ「学習」などのページが利用できます。また、新型コロナウイルス感染症の流行以前は、ネットシステムの使い方を対面でレク

チャーする講習会も定期的に行っており、ネット上でやりとりする利用者同士が、直接会ってコミュニケーションできる機会もありました。新型コロナウイルス感染症の流行後は、オンライン上での支援を行っている他、ベテランの利用者が、新しい利用者に使い方のコツを教えてフォローし合うなど、利用者同士での学び合いも行われ、積極的に活用されています。利用者からの声として、「オンラインカフェで初対面の方とやりとりするのは、始めは不思議な感じがしたが、近況や日々の出来事などが知れるにつれて、友人のような親しみが感じられた」「毎日の健康チェックがしやすくなった」などのネットシステムの効用に関する意見が多く見られる一方で、「操作は慣れれば簡単だが、慣れるまでは四苦八苦してうまくできなかった」「写真を色々投稿していたが、プライバシーのこと（プライバシーが特定されるような写真は投稿しない）などのアドバイスをもらって、改めてネットの使い方に気を付けなければと思いました」などの意見も見られ、今後の改善点やインターネットを利用する上での課題も挙げられています。

あわせて、このネットシステムを利用することで、利用者によどのような効果があるかを測定する実践実験も行っています。その主な結果として、ネットシステムでの交流が多いほど、主観的幸福感や生活の豊かさが高くなることや、オンラインでの対人交流量が高くなり、孤独感が低くなることなどが明らかになりました。これらのことから、ネットシステムの利用により、高齢者同士の交流が増加し、社会的活動や幸福感が高まる可能性があるといえます。

新型コロナウイルス感染症の流行により、インターネットの重要性はこれまで以上に高まり、個人、産業、社会のレベルでも、様々なオンラインでの取り組みが行われています。その中で、今後も高齢者向けネットシステムを拡充していくことにより、高齢者に役立つ場を提供していければと考えています。



研究棟の窓辺にて

子どもの姿から探究し 語り合う

教育学部 幼児教育学科
菅井 洋子



昨年度1年間(2020年4月～2021年3月)、国内研究員(私学研修員)として東京大学大学院教育学研究科の秋田喜代美教授の御指導のもと研究に専念する機会をいただきました。貴重な研究期間を賜りました川村学園女子大学、そして支えて下さったすべての方々に心より感謝し、御礼申し上げます。

これまで「子どもの姿から探究すること」に惹きつけられ、とくに言葉を話す前の乳児が、家庭や園等の場でいかに周りの人と出会い、様々な物・出来事と関わりながら発達していくのかを解明しようと研究に着手してきました。研究知見をもとに教育・研究活動で多様な人と子どもについて語り合い、考え続けることに没頭できる時間は心が弾みます。乳児期は、その後の育ちにつながる土台となり、学びの芽生えの時期でもある等、乳児保育含めその重要性が改めて認識されてきています。しかし家庭や園等で乳児と関わる際に、乳児が何を伝えようとしているのか、乳児の行動の意味を読みとり応答し、寄り添うことの難しさが親や保育者、保育者をめざす学生たちから語られることがあります。

これらの声や姿をふまえ研究期間に、「乳児の主体的な行動(発声、表情、身体の動き等)の発達の意味」や「乳児と関わる人(親や保育者等)の応答的な関わり」を探り、乳児期特有の共同活動を発達プロセスに位置づけ、今後の保育者養成教育へ示唆を得ることを目的とし研究に邁進いたしました。また、東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター(Cedep)とポプラ社による子どもと絵本・本に関する共同研究にも参加させていただ

いたことを機に、全国の保育・幼児教育施設や図書館への実態調査・写真分析の結果を広く発表・発信し、すべての子どもたちの豊かな絵本・本環境の創造と発展に向けて、多様な人の声を聴き、語り合う場へ参画し続けています(写真参照)。

乳児が「絵本をなめたりたたいたりして絵本に興味がないようです」等の声を聴いたことはありませんか。乳児にとっては生活の中で関わる「物」と同じように「絵」にも身体で関わり興味や関心をもち探索している姿であることが研究から判明しています。その後「絵」の性質を理解し始めると、絵を指さす行動がみられるようになる等の発達プロセスがみだされています。乳児が初めて絵を指さす姿は、絵とは何かを理解し、「はじめて」に出会えた喜びへとつながる瞬間なのです。絵本を読みあひながら乳児の行動の意味を読み取りやりとりが展開したときには、乳児やその場にいる人たちに笑顔が広がり、印象に残る場面となっていきます。乳児や乳児保育についてはまだ解明されていないことが多々あります。複数の乳児たちの意図を瞬時に読み取り応答する集団保育での保育者の姿に、学生たちとともに心動かされながら学び、乳児の姿や乳児体験から専門職としての保育者のあり方等についてもさらに探究し続けていきたいと考えています。

新型コロナウイルス感染症の流行により先が見通せず、研究計画を変更せざるを得ないこともありましたが、しかしいかなるときも学びや研究を止めないという強い志をもち、新たな方法を模索し追究し続けようとする研究に関わった方々に、幾度となく支えられました。実際に空間を共有し対面することは1年間叶いませんでしたが、パソコンの画面上の「参加」をクリックすると「空間(国や場等)」を越えて多様な人達とつながり子どものことをともに考え続けられる環境に「令和型どこでもドア」を手に入れたようで心躍ることもありました。オンラインによる論文指導会・園内研修への参加等、新たな可能性が広がっていることに気づき、オンラインでつながる多様な方法に苦戦しながらも、参加する人たちが各々のつよみをいかして協働しあい学び合う場へ私も身を置き続けました。新たな人や物・出来事との関わりについて体験しながらじっくりと考える思いがけない機会にも恵まれたと感じているところで

す。現在は、昨年度のことを活かせるように本学幼児教育学科がめざす保育者像のもとに、学生たちとオンラインで大学と園をつなぎ交流する等の新たな試みにも挑戦しています。過去・現在の子どもの姿や、未来の姿をも見通しながら空間・時間の広がりの中で保育について考え、学生がつよみをいかした保育者として成長し続けられるようにとの願いのもと新たな教育・研究活動を歩み始めております。



多様な人の声を聴き、語り合うために
(オンライン講演・研修、リーフレット作成等)



児童教育学科

山口 祐子 教授

教育学部

学校では、コロナ感染症予防対策を講じて、早2年が過ぎようとしています。子ども達は、「命の尊さや自分も相手も大切にすること」を自然に学びました。
学校現場から着任しましたので、予測不可能な時代を児童がたくましく生き抜くために必要な「教師力」について、気づかせ考えさせていきたいと思っています。教育改革のど真ん中にいる学生に、日本の教育の現状を理解させ、学習指導要領の改訂や令和の日本型学校教育の構築等、大きな転換期であること、必要な改革を躊躇することなく進めるべき時であることを実感させていきたいと思っています。
教師のやりがいと共に、現場の厳しさも伝えながら、想像と創造の両翼をもった学生を育てていけたらと考えています。

「私は魔女。故郷のトンカラ山から人間界に修行にやってきました。年齢は327才。汗と涙を集めています。黒い三角帽にフクロウ色のドレス、魔法の小瓶を胸に、こんな自己紹介をしてから38年が経ちました。関宿町立木間ヶ瀬小学校を振り出しに、この3月まで、我孫子市立新木小学校に勤務していました。その間、『感性を磨く』を合言葉に、詩や俳句、メルヘンなど創作活動に関わってきました。

児童教育学科では、国語科教員として、学生たちと創作活動をスタートさせました。言葉は人から人へ受け継がれてきた人類最大の財産です。ともに語り合い、ともに学び合い、よりよい授業の在り方を追求していきましょう。皆さんの高い使命感と志を胸に、私も成長したいと願っています。



児童教育学科

横山 悦子 教授

教育学部



心理学科

今井 正司 准教授

文学部

脳科学の観点からメンタルヘルスの悪化や改善について研究を行いながら、さまざまな領域（保育園・学校・心療内科など）でカウンセリングや支援を行っています。私が今取り組んでいるのは「マインドフルネス」の応用についてです。メンタルヘルスで用いられてきた理論と実践法を教育や育児にも適用し、それらを脳科学的な側面からも理解しようとする試みです。特に、神経行動教育学という分野の確立を目指し、学習と適応を同時に促進するプログラムを開発しています。心理療法においては、新世代認知行動療法と呼ばれる治療法群の専門家でもあるので、それらの理論的統合を目指す活動をしています。
大学での学びは、単位数やGPAの評価では測定できないものであふれかえっています。学びたいと思うものがみつかったら、全力で取り組んでみましょう！

ドラマ『相棒』が好きです。若者の貧困問題を取り上げたSeason9第8話「ボーダーライン」やDVを扱ったSeason14第13・14話「声なき者」は、私の専門である教育学にも関わる興味深い内容です。

いつか学生さんたちと議論してみたいのが、Season10元旦スペシャル「サクラ」。権力をもつ大人に無理やり犯罪に加担させられ、ついに銃をとってしまった若者に、右京さんは語りかけます。正義とは「根の弱い人工の植物」のようなもの、大切に育てなければすぐ枯れてしまうと。そして「僕は君に、正義と公正さを望み、それを実現しようと努力する側の人間であってほしいと願っています」と。社会的弱者の立場からの作品を描く太田愛さんの脚本です。川村の学生さんは、右京さんの台詞をどんなふうに使えようか。



史学科

柴田 万里子 講師

文学部



幼児教育学科

中山 佳寿子 講師

教育学部

幼児教育学科に着任いたしました中山佳寿子と申します。専門は劇遊び・ごっこ遊び・日本の保育史です。私が初めて保育に興味を抱いたのは大学の文学部を卒業し、私が劇作家として演劇活動に没頭していた時期のことでした。ある子どもたちのための舞台作品を依頼されたのです。上演した時の子どもたちの生き生きしたまなざしとヴィヴィッドな反応が嬉しかったのをよく憶えています。それ以来、保育学・教育学を探究する日々が続き、今日に至ります。学びはよく「旅」に例えられますが、私は皆さんと知識という「地図」を一緒に覗き込みながら、幼児教育の世界を探検したいと思っています。さあ、学びの旅を楽しみましょう。

2021年4月に着任しました山口恭平と申します。どうぞよろしくお願いいたします。専門は教育学で、教育思想や教育史をやっています。「教育原理」や「学校と教育の歴史」、「道徳の理論と指導法」などを担当しています。これまで授業やゼミ、教員採用試験対策などで、学生の皆さんと学んできました。川村の皆さんは、授業や課題にも丁寧に取り組んでいて、学びに対して真摯に向き合っていると感じています。一口に教育学と言っても、教育哲学、教育社会学、教育方法学など、そこにはさまざまな領域が存在します。私の授業で扱う内容では、理論的なことがらなど、どうしても抽象的な話が多くなってしまうのですが、少し難しいと思われる内容に対しても、皆さん一生懸命、粘り強く考えてくれています。そうした姿勢に日々励まされています。



児童教育学科

山口 恭平 講師

教育学部



観光文化学科

江口 智子 講師

生活創造学部

観光文化学科に着任いたしました江口智子と申します。「ホスピタリティ入門」、「観光経営学」、「リーダーシップ論」などを担当しております。バックグラウンドとしては経済学・金融論ですが、「観光による地域活性化」、なかでもワインをはじめとしたフード・ツーリズムを通じた地方創生をテーマとして研究しています。観光という分野にはいま、社会から大きな期待が寄せられていると感じています。それは日本に限らず世界中で、観光によって経済的に豊かになるだけでなく、その国や地域の「素晴らしいもの」を維持・発展させるために観光を活用したいという期待だと考えています。多くの学生に、そのような期待に応えて社会で幅広く活躍して欲しいと思っています。

史学科に着任いたしました志村瑠璃と申します。専門は図書館情報学です。読者に本を媒介する仕組みとしての図書館と書店について研究しています。本という形になった知識や情報が社会の中にどのように配置され、人々はどこでどのような知識や情報を利用できるようになっているのかということに関心があります。

担当しているのは、司書の資格取得に関わる科目です。図書館は過去から現在までの知識を蓄積し、その膨大な知識を人々の自由な利用に供する重要な社会的インフラです。そして、司書は社会的インフラとしての図書館を支える専門職員です。司書の基礎的な知識と技術を学ぶことを通して、学生にはまず自分自身のために図書館を活用できるようになってほしいと思っています。



史学科

志村 瑠璃 講師

文学部



京都の中世史1
摂関政治から
院政へ

史学科 准教授
辻 浩和 共著

出版社：吉川弘文館
発行年：2021年11月



新書版
性差の日本史

史学科 准教授
辻 浩和 共著

出版社：集英社インターナショナル
発行年：2021年10月



「室町殿」の時代
—安定期室町幕府
研究の最前線

史学科 准教授
辻 浩和 共著

出版社：山川出版社
発行年：2021年12月



能楽の源流を
東アジアに問う
—多田富雄『望恨歌』
から世阿弥以前へ

史学科 准教授
辻 浩和 共著

出版社：風響社
発行年：2021年12月



論点・東洋史学
アジア・アフリカへの
問い158

史学科 准教授
辻 明日香 共著

出版社：ミネルヴァ書房
発行年：2022年1月



源氏物語を開く
—専門を異にする
国文学研究者による
論考54編

日本文化学科 准教授
山名 順子 共著

出版社：武蔵野書院
発行年：2021年3月



新・教職のための
教育原理

児童教育学科 教授
内海崎 貴子 編著

出版社：八千代出版
発行年：2021年4月



住まいの百科事典

生活文化学科 准教授
佐々木 唯 共著

出版社：丸善出版
発行年：2021年4月

2021年度 退職教員

【退職】 本学を退職する教員をご紹介します。皆様のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。

熊谷 園子 文学部国際英語学科 教授
松本 修 文学部国際英語学科 講師
国谷 直己 教育学部幼児教育学科 講師
向野 光 教育学部児童教育学科 教授

甲山 恵美 生活創造学部生活文化学科 講師
田中 実 生活創造学部観光文化学科 教授
丹治 朋子 生活創造学部観光文化学科 教授
中山 穂孝 生活創造学部観光文化学科 講師

心理相談センターの活動

本年もコロナの影響が懸念される中、7月に初の試みであるオンライン公開講座（思春期を乗りきるための心理学）を実施した所、感謝のコメントや継続した講座開催希望の声を多数いただきました。8～9月は緊急事態宣言の再施行により閉室となりました。大学院生は相談者と接する実践実習の中断を余儀なくされましたが、その間、オンラインによる事例検討会等の代替実習を積極的に行い再開に備えておりました。10月から相談業務を再開しました。写真は大学院生による、心理検査の練習風景です。地域に開かれた「こころの相談室」としての役割の必要性を再認識し、今後も尽力していきたいと思っております。



2021年度 大学行事



2021年10月17日に、初の試みとしてオンライン学園祭第32回鶴雅祭を開催いたしました。
14号館2階ラウンジをスタジオにして放送いたしました。
はじめての取り組みでしたが大きなトラブルもなく無事終了いたしました。

花時計 vol.43 2022年3月1日 発行日

【発行】 川村学園女子大学 【編集】 広報委員会

〒270-1138 千葉県我孫子市下ヶ戸1133番地
TEL 04-7183-0111 (代表)
ホームページ <https://www.kgwu.ac.jp/>

■目白キャンパス

〒171-0031 東京都豊島区目白3丁目1番19号
TEL 03-3951-0111 (代表)

大学ホームページ

大学ブログ

facebook

twitter

LINE

Instagram

